



## 第4分科会

### 人権確立をめざすまちづくり

部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざすまちづくりをどうすすめているか

#### ④分散会

#### I はじめに

6つの討議の柱を全体で確認し、この分科会で報告される5つの実践を中心に、参加されているさまざまな地域や団体の方々の取組・実践を交流しながら、討議を深めていくことを呼びかけ、報告に入った。

#### II 報告及び質疑討論の概要

##### —報告1—⑧

「これからも、自分を高めながら楽しく学び合いたい」～かけがえのない識字学級（福岡県同教）  
—主な質疑と意見—

**大阪** 全国的に識字学級の取組がマンネリ化している現実がある。そんな中、識字を文化運動へと高めていることはすばらしい。今までの取組を土台としながら、新しい識字のあり方を模索するために、支部がどのような働きかけをしているのかを知りたい。

**報告者** 識字学級発足当時の人たちは高齢化し、今はほとんど来ていない。支部で活動の中核を担っていた人たちも然りで、その上、法律が切れて以降、支部の力が弱くなっている。識字学級の必要性について具体的な実態は把握できていないが、今のニーズに合った内容を作っていく。文字を学ぶことは人間としての尊厳を取り戻すこと。豊かな学びの場、安心できる居場所になるよう、今のメンバーでやれることを続けていきたい。

**滋賀** 活動をしていく上で、場所や資金など運営面の大変さを痛感している。運営面での工夫を教えてください。

**報告者** 現実的に資金はとても大切。法律が切れて以降は、県の一般対策の中で社会参加促進支援事業として支援をしてもらっているが、十分ではない。識字学級で使用している資料を教材化し、人権・同和担当者に購入してもらうなど、活動資金を工面している。活動を広めていく、啓発をしていくこととセットにして返していきたい。

**兵庫** 結婚の際に父親からの反対があったということであったが、今日のような研究大会をとおして、部落差別の理不尽さについてみんなで考えていくことで、差別をなくしていくことができる。地区に入って、どのような思いをしたか。

**報告者** 昔から受け継いできた差別が実際にあ

った。地区に入り、周りの人にとっても優しくしてもらった。なおさら、なぜこのような差別があるのか、誤解があるのかと不思議に思った。たくさん苦労したが、根気強く話すことで理解者はふえた。

**福岡** 識字の灯を消していけないと強く思う。どのような経緯で識字学級を立ち上げたのかを知りたい。

**報告者** 乗り物に乗る時やいろいろな手続きをする際など生活に不便を感じている人がたくさんいた。支部長が教育委員会に相談したところ、校区内に識字に携わっていた同推がいたので、ノウハウを教えてもらい、関係者で協議を重ね、1年経たずして発足させることができた。

**協力者** 識字をしなければいけない社会の問題にふれることができた。識字の灯は消さないという思いは、まちづくりのヒントにつながっていく。

##### —報告2—⑩

地域だからこそできる人権教育～さまざまな「出会い」「体験」を通して（大阪市人教）

##### —主な質疑と意見—

**〇〇** 子どもたちの活動に教職員がどのようにかかわっているのか。学校での子どもたちの様子をどのように捉えているのかを知りたい。

**福岡** 地区出身の子どもがどれくらい参加しているのか。

**報告者** 月1回、教育機関が集まるケース会議の中で支援が必要な生徒の共有、活動の情報発信を行っている。その効果もあり、子どもたちの様子を見に来たり、手伝ってくれたりと連携が図られている。地区の出身者は1割から3割ぐらい。

**三重** 大切にしていかなければならないのは、学習や食事などにおいて厳しい立場にいる子どもたちを元気にしていくことだと思う。学校や地域とどのように連携して活動しているのか。

**福岡** この取組の継承について知りたい。

**報告者** 週に2回の学習支援や月2回の子ども食堂などを実施している。その場に来られない子どもたちには、学校やSSWと連携して、お知らせを届けたり訪問活動をしている。2009年に青少年会館条例がなくなり、地域の子ども会や保護者会の活動拠点がなくなってしまった。拠点をどのように作っていくのかという議論の末、現在のような活動につながっている。住吉隣保館の初代館長の言葉に、「忘れてはならない自主解放」というのがある。地域の福祉や教育を底上げしていくには、地域の人材を育て、活用していくことが大切である。ネットワークを広げ、自分たちの力で未来を切り拓いていく力をつけることを理念にしている。

**福岡** 校区内の保護者や大人への啓発による意識の高まり、課題などについて知りたい。

**報告者** 立場の自覚について、保護者がどのように伝えていくのか。保護者会がなくなった今、連携がなかなか難しい現実があるが、活動に保護者

を巻き込んで、共に考えていく環境をつくりたい。昔に比べ、部落差別が見えにくい問題になっているのは確かだが、具体的に差別はあるんだということを知ること。学校教育の中で差別の実態について正しく教えること。地区の子どもが立場宣言をした時に、地域全体でフォローしていく関係性を作っていくことが大切だと思う。

#### —1日目のまとめ—

1本目の報告では、文字を奪われた背景に厳しい差別の現実がある。たくさんのお会いの中で識字学級につながった。これからも継続していくために、拠点や運営面での課題はあるが、活動の意義を見つめ直すことが必要である。

2本目の報告では、連携があってこそ多岐にわたる活動ができていく。オガリ像が象徴するように、先人たちから学び、明日を担う子どもたちに何を残すのか。さまざまな出会いから子どもたちは学んでいる。差別をしない・させない子どもづくりを地域の目標として、大人たちがつながっていくことを願いたい。

一人一人が存在を認められ、安心・安全に過ごせる居場所づくりこそが人権確立をめざすまちづくりにつながる。地域をつなげるために何ができるのか。生きることに自信をもてるまちづくりをめざし、みんなで考え、どのようなヒントを持ち帰るのか。明日の報告で確認し合いたい。

#### —報告3—⑮

「識字学級」から「交流学級」へ、正和識字学級、34年のあゆみ～地区内の活動から交流・啓発へ～  
(高知県人教)

#### —主な質疑と意見—

**福岡** 解放文化祭などで、差別を許さない子どもたちをつくるためにどのような話をしているのか。

**福岡** 識字学級から交流学級になったことで、どのような話をしているのか。また、交流学級になってよかったと思えることを教えてほしい。

**報告者** 年に数回子どもたちに話をしていく。草履づくりをしているところに来て、いろいろな質問をしていく子どももいる。正和地区の教材をとおしての交流や合同の人権学習も行っている。交流学級の中では日常のいろいろな話をはじめ、教材に出てきたことから発展して、人権問題について意見を交わすこともある。識字学級の意義については、1年の最初にしっかり確認している。地区外の参加者が増え、交流の幅が広がっていることが嬉しい。

**大阪** 部落の人でも部落外の人でも文字を取り戻すだけでなく、学べる力を識字をとおして身につけることが大切だと思う。学び合う視点をしっかりと持っていききたい。

**埼玉** 隣保館で文化活動をしているが、高齢化がすすみ、なかなかできなくなっている。取組の意図を聞きたい。また、地区外の人へ差別の思いを十分に伝えられない現実がある。交流がうまくできているようであらやましい。何か秘訣があるの

だろうか。

**報告者** 毎年、作品作りには悩む。長年続けてきていることに誇りを持ち、学び続けたらこんな作品ができるんだという思いがある。交流のきっかけは、元々、生け花や他の講座に通っていた人が自然な流れで加わってきた。

**滋賀** 「夕焼けが美しい」や「ひらがなにつき」とおして、子どもたちと共に、識字から部落問題を考えることをしている。地区の人々との交流から、部落問題としっかり向き合っていかなければならないという思いを常に持っている。報告者の「夢や目標に向かって学び続ける人になるために、しっかりと勉強していく」という言葉に胸を打たれた。これからの夢を聞かせてほしい。指導者の方の変革も教えてほしい。

**報告者** 先生が来てくれる限り、学び続けたいと思う。識字の指導をするようになって、教育へ厳しさが持てるようになった。若い頃から今まで、周りの人にたくさんかわいがってもらった。今やらなければならないことは後回しにせず、やり遂げようと思うようになった。識字学級に通う人たちの姿から学んだことは他にもたくさんある。

#### —報告4—⑩

気になる現実を気にしていきたい、そんな現実を  
生きている人を気にしていきたい(滋賀県人教)

#### —主な質疑と意見—

**三重** 地区の方のさまざまな思いがある。伝えられない背景があるのも現実。

**大阪** 滋賀県で皮なめしをしている人にインタビューをした際に、その人の妻からどこに発表するつもりなのかを問われたそうだ。部落であることを知らせることは困る、必要性を感じないという人がいる中で、知らせることの意味を考えたい。

**報告者** 部落問題学習をしていく中で、なぜ今までできていなかったのか。以前、地区のある小学校に勤めていた時、運動で勝ち取ってきた誇りが地域にあり、学ぶ環境がしっかり整っていた。しかし、今の学校は、町の人が地区名を出してほしくないということで教職員にも周知している。なぜ、こうも違うのかと疑問に思う。部落差別をなくすための啓発を重ねることで、徐々に変化は見られるが、崩していかなければならない壁がある。名前は出さなくとも、ふるさとを誇りに思うような教育をしていくことが大切だ。SNSが発達している現代において、現実を知らなければ現実に負けてしまう。知らなくて出会うのと、知ってから出会うのでは向き合い方が変わるはずだ。知ることの大切さ、伝えることの大切さを今ここで問いかけていきたい。

**徳島** 差別をなくすためには教育の力が必要だ。そういう思いがあり、自分も教員になった。自分のことを本気で語り合える関係、仲間を作っていく力を子どもたちに身につけてほしい。そのためには、言葉の力を鍛えていかなければならない。

**福井** 大学の浪人があるように、高校の浪人があ

ってもいいのではないかと個人的に思う。周りの支えで、高校を卒業させてやりたい。

**兵庫** 地域に大きな皮革工場がある。以前は避けて通られていたが、今や規模も技術も日本一を誇れるような環境にあり、さまざまな団体が工場見学に来ている。20年前ほど前から、地区同士のつながりを強くするために隣保館祭りを行っている。学校では部落問題学習がしっかりと根付いている。差別のおかしさを学び、差別をなくす子どもたちを育てていきたい。

#### —報告5—⑦

#### 部落差別を乗り越える人権交流活動（兵庫県人教）

#### —主な質疑と意見—

**福岡** 部落問題学習をしていく上で、正しく知るといことが大切だと思う。小学校の6年間で系統立てて、学習を積み上げていくことは本当に素晴らしい。そういう環境の中で、地区の子どもたちの姿、解放運動を担う人材が育っているか。また、条例成立までの苦労や組織作り、今見える変化・成果などについて知りたい。

**報告者** 地区の子どもたちには学校の先生がしっかりとかがわってくれている。構との出会い学習をとおして、地区の人のすごさを実感する。合同学習発表会で、自分の将来や希望について自分の言葉で語らせている。その姿を地区内外問わず応援していくことで、子どもたちに誇りを持たせたい。協力者をどう作っていくかは、若い世代に向けての啓発活動、学校・行政・一般・地域など、いろいろなところを巻き込んでいくことで、自分ごととして捉える人をふやす。条例制定は、地区の人より地区外の人の方が強く要望した。学生時代の学習や体験が起因している。満場一致での制定となった。

**京都** たつの市が推進している「差別される側と差別する側がともに乗り越える人権交流活動」というテーマに込められた思いや願いを知りたい。

**報告者** あえてわかりやすく表記している。差別をする者がいなくなったら差別は起こらない。市民を2つに分けているわけではなく、ともに差別のおかしさに気づき、学習していくという思いが込められている。

**福岡** 大人の人権講座から子どもの講座へ切り替えた経緯を知りたい。

**福岡** 部落差別をなくしていくための仲間づくりが市全体で行われていることに感動を感じる。報告書後半のところに、保護者の相乗効果という表現があるが、取組や変容があれば知りたい。

**報告者** 大人の講座だけやっても部落問題はなくなる。大人の講座は一定の効果を上げたので、今後は20年から30年先を見据え、市のリーダーを作っていこうと子どもの講座に切り替えた。子どもの講座をとおして、親同士がつながる。親子で取り組む活動を仕組むことで、参加者がどんどん増えていった。学校と行政が車の両輪となり、子どもたちの人権教育をどのように

つくっていくかを考えている。子どもを中心に、大人のネットワークがつながってきている。

#### III 総括討論

人権のまちづくりを確立するために、学習者の拠点づくり、地域・学校・行政の連携のあり方を視点に意見を交流した。

**福岡** 部落差別をなくすためにプラスイメージで教えることが大切だと思う。小5で部落差別という言葉やそのおかしさについて教える。そして、社会運動や水平社の学習を経て、小6で立場の自覚をさせる。数回にわたり、親子で解放学習を積み重ね、子どもをおこしていく。差別の現実があるからこそ、向き合っていないといけない。

**三重** たつの市の校区版のような取組をしてきた。部落差別のことは直接教えられないが、1軒1軒家庭訪問を繰り返し、子どもたちの学習のふり返りを基にして、今できることを話し合う。親が一人で抱えるのではなく、周りでフォローしていく体制をとっている。

**大阪** 現代における部落差別の現実を把握しなければならない。2010年の鳥取ループによる事件では、ネットで出回ってしまうと、いくら削除しようとしても消せない、どんどん拡散してしまう。新しい状況に対してどのように対応していけばいいのかが問われている。破戒の丑松のように、名乗ることではか前へ進めないのではないか。名乗らなくても、自分自身と向き合える状況をつくるのが大切ではないだろうか。

**福岡** 数十年ぶりにこの会に参加をして、熱と光を感じた。「人の世に熱あれ」という言葉を噛みしめた一日であった。差別は人の熱を奪っていく。人は人と出会うことで生きる力がわいてくる。熱とは優しさや励まし、うなずきではないだろうか。だれかと出会うことで輝きを持つことができる。

**徳島** 本気で語り合ったことはいつまでも記憶に残る。そして、それが生き抜く力になる。学びの場や伝えたい場をつくっていくが大切。乗り越えた喜びが力になり、誇りを持って語ることができる。

**三重** 無知が差別を生む。自分ごととして捉えていくことで、学びの場の中で変わっていく。いつでもだれでも変わることができると思う。

#### IV まとめ

人権確立をめざすまちづくりをテーマに、報告者、参加者両方から盛んな意見の交流ができた。

交流活動では、地域の実態に合わせ、地区内外の子どもたちや保護者を巻き込んでの取組が展開されている。識字学級の灯を消してはいけないという思いを再確認することができた。ただ字を取り戻すだけの場ではなく、人権のまちづくりの核となる場である。

地場産業の衰退や若者の都市流出などにより、学習の拠点づくりが困難になってきている。多様な立場の人と出会い、つながりの中で主体的に学んでいくこと。参加者の増加と学びの深まりの背

景には、隣保館、地域、学校、保護者の確かな連携が必要不可欠であることが確認された。地域が担う役割を見つけ、ニーズに合った事業の計画をしていく。その活動の中で人材を育成していくことが必要である。集まってきた人は必ず種をもらっている。

学校は人権教育をすすめていく立場、行政は啓発をすすめていく立場。教育を与えると、自発的に活動する熱が生まれる。議論の成果や課題として、いくつかのポイントが挙げられた。地区内外の共同の取組が効を奏していること。子どもを中心に据えた活動が大人をつないでいること。その中で成長した子どもが次世代のリーダーとして成長していること。地域のニーズに合わせた居場所づくりが必要であること。これらをキーワードにして、各地域で工夫を凝らし、ピンチをチャンスに変えていく取組につなげていきましょう。最後に、立場の自覚についての議論が熱心に行われたことは大変意義がある。どのように自覚をしていくのかということについて、これからも交流していきましょう。